

日本の農家の系統的研究

建造物研究室

日本の農家主屋には、図のように、基本的で性格の明らかな型がある。それぞれの基本型には部屋数を加えた類似の平面があり、基本型を核として形態的に関連した平面型の群が想定される。一つの群内では単純な型から複雑な型への発展が実証されることも多く、系統的なつながりも濃いが、形が似ているだけで発展の上では無関係のものも含まれている。群に若干の修正を加え、系統的関連のある型の集合に再編成したものを系統群と仮称し、近世民家の発展を系統群の変遷として概観すると次のようになる。

(1) 近世民家の成立は地方により遅速はあるものの17世紀とみられている。各系統群の中心となる図の平面型はすべて17世紀には出現している。しかし、これらの平面型をとる家は上層に限られ、大部分の家は系統的特色に乏しい平面(床上1室、あるいは部屋の性格不明瞭な2室)であった。これら17世紀の小型の家は消滅し、小数の大型家のみを今日見るわけである。

(2) 17世紀の分布状況は、近畿に713・754系統群(713・754型を含む)、関東に411・431(452型を含む)・512の系統群があり、その他では411が多いなかで四国の501(211型を含む)など地方的類型が点在していた。東北、九州の遺構数はきわめて少ない。

(3) 18世紀は、前世紀の地方的特色を保ちつつ754系統群が各地に現われ、これの進出しない東北には431系統群が拡がってゆく。

(4) 19世紀に入ると、754系統群は東北以外の各地に濃密に分布する。411系統群は全国的に少なくなるが、東北では431と共に主流となっている。

(5) 19世紀には各系統群とも類型が増え、核となる基本型の比率は下がる。大型で複雑な平面が現われるが、反面、系統群の特色は薄れ、どの系統群に属するか判断できないようなものもでてくる。

(6) 近世を通じてもっとも重要な系統群は411と754で、この両者の合計比率は各世紀とも50%を超える。両者は、系統群が徐々に衰退し他の系統群と共に754系統群へ収斂する過程をとる。

(7) 視点を変え、民家としてもっとも特色のある広間(日常生活の場であると同時に接客も行なわれる、民家独自の意匠のある部屋)を指標としてみると、広間のない素朴な家から広間のある家へ、そして広間が座敷にとって変るとい経過をたどる。

なお、この研究は既刊の民家関係調査報告書、修理工事報告書を基礎資料として用いている。

(吉田 靖)

